

時 秋にして積雨霽(晴)れ 新涼郊墟に入る
燈火ようか稍べく親しむ可かんべんく、 簡編、卷舒けんじゆす可し

— 韓愈「符詭書城南」 —

秋になると涼しくなり夜も長くなって、燈火の下で読書するのに適している。



秋の夜長…。

一年中でもっとも夜が長いのは冬至ですが、
秋分を過ぎて初めて夜の長さが実感されるから

「夜が長くなった」

この言葉なのです。

“秋の燈”という季語があります。

“秋ともし”とも“秋燈”とも言い表します。

春燈しゅんとうが艶おぼろっぽく朧おぼろなイメージに対して

秋の燈は大気が澄みとおって清明な雰囲気があります。

燈火親しむべく—

燈火の下で書物を広げるには秋の夜長はふさわしい季節です。

図書館は人間の長い歴史と共に常に知的な創造の場、空間でありつづけたといえる。

日本において「図書館」の名称が使われたのは明治に入ってから—。

書物を保存するための施設は古くから存在し、収集した書物を公開する場合は「文庫」がその役割を果たしてきた。

「文庫」は、すでに奈良時代にその姿を見ることが出来る。

古代～平安時代

古来、中国大陸と交流があった日本。六世紀には仏教とともに経典が渡来し、朝廷周辺に書物や記録類が集積されるようになった。奈良時代に律令制が誕生すると中務省に国家的な蔵書を管理する「図書寮」が置かれ、貴族たちも個人所有の蔵書を収める文庫を持ち始めた。

わが国最初の公開図書館は、奈良時代の末期、石上宅嗣が邸内に芸亭（芸亭院）と称する文庫を設け、人々に公開利用させたことが始まりである。

『続日本紀』によると、宅嗣がその旧宅を阿闍寺として、寺内の一隅に外典（仏教関係以外の書）を収蔵する書庫を設け、芸亭と名づけ、閲覧を希望する好学の士があれば、自由にこれを許したとある。芸亭の「芸」は香草のことで、虫を防ぐため書籍に挟んだのが書籍の別名になったからとか、阿闍如来を示す梵字の「ウン」と同音の漢字からとったとの説がある。 『日本大百科全書』

宝字より後、宅嗣と淡海真人三船とを文人の首とす。著せる詩賦数十首、世に多く伝誦す。その旧宅を捨てて阿闍寺とす。寺の内の一隅に、特に外典の院を置き、名けて芸亭と曰ふ。如し好学の徒有りて就きて閱せむと欲ふ者には恣に聴せり。 『続日本紀 卷第三十六』

石上氏は物部氏の流れを汲む名族で、軍事的な面で天皇家に貢献してきた。

宅嗣は武門の家に生まれたが、儒教の書物や歴史書、さらには仏教書も幅広く収集し、書籍に関する広範な知識を持っていた人物だといわれている。漢詩や和歌も好み、勅撰漢詩集『経国集』や『万葉集』にも作品が収録されている。

芸亭の所在については、建久御巡礼記（十二世紀末、僧実叡）によれば、平城京左京二条二坊の地（現奈良市法華寺町）にあったと考えられる。（『続日本紀 卷第三十六補注』）

現在、奈良市立一条高等学校の敷地内が芸亭の所在地と推定されており記念碑が立っている。

奈良・平安時代、芸亭以後の私設公開図書館には、和氣広世（和氣清麻呂の息子）が開設した弘文院（京都）や、菅原道真が京都の邸内に設けた書斎兼文庫である紅梅殿がある。

鎌倉～室町時代

武家社会が到来すると武士が文庫を持つようになり、これを武家文庫と呼んだ。代表的な武家文庫として鎌倉時代に北条実時^{ほうじょうさねとき}が武蔵国の金沢村（現横浜市金沢区）に創建したと伝えられる金沢文庫^{かなざわ}（かねざわぶんこともいう）である。金沢流北条氏らにより蔵書の拡充、収集が続くが幕府滅亡後は菩提寺の称名寺に管理が委ねられ、荒廢、復興を繰り返しながら、現在は鎌倉時代の古典籍を所蔵する神奈川県博物館施設として存続している。

また、室町時代から戦国時代、下野国足利荘（現栃木県足利市）に設けられた漢学研修のための高等教育機関足利学校は多数の書物が保管され、学校図書館の機能を果たしていた。関東の最高学府といわれ、最盛期には三千人の学僧が学んだといわれる。

江戸時代

江戸幕府を開いた徳川家康は好学で知られており、駿河文庫と富士見亭文庫を開設した。駿河文庫は家康が儒学者林羅山に命じて駿府城に作らせた文庫で開設年については次のように考察されている。

慶長十二年（1607）十二月に駿府城が火災に遭った際、「御文庫宝蔵^{つづが}は恙^{つづが}なかりしかども、御座に置れし御宝物ども、一として烏有^{うゆう}たらざるはなし」（『徳川実紀』）とあるので、駿河文庫はこの時点では存在したと考えられています。 『図書館と江戸時代の人びと』 新藤透 著

家康没後は最も貴重な本は富士見亭文庫に移され、残りは尾張^{おわりほうさ}（尾張蓬左文庫）・紀伊（紀州南紀文庫）・水戸^{みとしょうこうかん}（水戸彰考館文庫）の御三家^{するが おゆづりほん}に駿河御譲本として分けられた。

一方の富士見亭文庫は、慶長七年（1602）に江戸城本丸の南端の富士見の亭に（現在の富士見櫓付近）に設置された。家康が文庫を設置した動機や蔵書について『徳川実紀』は次のように伝えている。

応仁よりこのかた百有余年騒乱打ちつゞき。天下の書籍ことごとく散佚^{さんいつ}せしを御嘆^{あまね}きありて。遍^{あまね}く古書^{こうきゅう}を購求^{こうきゅう}せしめらる。

（応仁の合戦より戦乱が続く貴重な書籍が散逸したことを嘆き、可能な限り図書を収集した。）

慶長七年江戸城内にはじめて御文庫を創建せられ。金澤文庫に傳へし古書どもをもあまためして収貯せられ。

（慶長七年江戸城内に金澤文庫の貴重書を接收し初めて御文庫を創建した。）

三代将軍家光の代に城内の紅葉山に移設された富士見亭文庫は、紅葉山文庫^{もみじやま}（御文庫^{ごぶんこ}）と称された。四人の書物奉行が任命され、蔵書管理や目録編纂、学者や一部の藩への許可制の貸出など図書館らしい形態へと発展していった。蔵書数は幕末には十万冊をこえたといわれており、その大部分は国立公文書館に移されている。

また、諸藩や藩校でも文庫を設置。天保十三年（1842）に書物出版取締令により、幕府直轄の昌平坂^{しょうへいざか}学問所には全国の書籍が集められ、日本における納本制度の先駆けとなった。

※ 納本制度とは、図書等の出版物をその国の責任ある公的機関に納入することを発行者等に義務づける制度。出版物を国の責任で収集し、国民共有の文化財や情報資源として保存、後世に伝えるという大きな意義をもつ。

こうした幕府の文庫とは別に板坂^{いたさか}ト斎^{とさい}による浅草文庫^{あさくさぶんこ}や青柳文蔵^{あおやぎぶんぞう}が設けた青柳文庫^{あおやぎぶんこ}（仙台）のような一般公開する民間の私設文庫も登場した。伊勢の射和文庫^{いざわぶんこ}も公開文庫としてよく知られている。また、寺子屋を始めとする教育の発展による識字率が向上する中、庶民と書物を結びつけたのは貸本屋だった。

天保期には江戸に八百軒の貸本屋があり全国各地に存在していた。なかでも明和四年（1767）の創業以来、明治まで百三十年以上も続いた名古屋の「大惣」こと大野屋惣八は有名で、一般庶民はもとより、尾張藩士や曲亭馬琴、十返舎一九も利用客であったという。

明治時代

明治の新時代を迎えると、新政府は近代化を推し進めようと、様々な政策を実行した。図書館の設置もそのひとつである。

明治五年（1872）、文部省により、旧幕府学問所の蔵書をもとに東京湯島の昌平坂学問所跡に日本初の官立公開図書館書籍館^{しよじやくかん}が設立された。この書籍館は、二年後には浅草に移設され東京書籍館と名を変え、さらに明治十三年（1880）、東京図書館（通称上野図書館）と改められた。

この時日本で初めて「図書館」の名が冠されたのである。

明治時代以降、日本では図書館が図書を集積し、管理する中心的機関になる。明治時代に設置されるようになった図書館が発展して、今日の図書館となっていった。

神都伊勢の図書館史 ～文庫から図書館へ

神宮鎮座以来、悠久の歴史を紡いできた伊勢の地。

脈々と続いてきた外部との交流により、人々は彩り豊かで多様な文化を織り成した。おかげ参りなどの伊勢参宮の人々の往来、多くの文人墨客や学者もはるばる参拝に訪れ、伊勢は文化の交流・発信地となっていった。また御師の全国各地への行脚は、その時代における新しい文化を吸収し伝統に育まれた伊勢の文化の水準を高めていった要因であるともいえる。

伊勢において文庫の沿革は神宮における文書収蔵の歴史そのものと重なる。

伊勢神宮に於ける文庫の沿革を按ずるに、其の起源は古く、奈良朝以前に遡ることが出来る。即ち皇大神宮域内に於ける、内宮文殿の創立是にして、太神宮諸雑事記によれば、既に天平神護二年十二月の條に、文殿の存在と神書記録収蔵の事が見えている。尋いで鎌倉時代に至り、外宮の文庫としては、豊受大神宮神庫

の設立を見る。鎗矢伊勢宮方記には、既に弘長元年に、神庫の存在していたことを載せている。此の文殿と神庫とは、日本図書館発達史上注意すべき存在にして、今日の神宮文庫は實に之を父母として生まれたものである。然れども、神宮文庫と最も密接の関係を有し、其の成立に重要な要素をなしたものは、宇治の林崎文庫及び山田の豊宮崎文庫である。『神宮文庫沿革資料』

古来、内外宮の両宮域内には文殿（ぶんでん・ふどの・ふみどの）（内宮）や神庫（しんこ）（外宮）と呼ばれる記録文書を収めるための施設があり、神職の研究や調査に利用されていた。

『太神宮諸雜事記』によると、天平神護二年（766）には内宮文殿が既に存在したことが窺われる記述がある。

内宮文殿焼失し、『日本紀』二部・『神代本紀』二巻を類焼【文殿記事初見】（『太神宮諸雜事記』）

（『神宮文庫の歩み』関係年表—神宮文庫・文書所蔵等の沿革について）

※『太神宮諸雜事記』…内宮禰宜家に代々伝えられた古い記録文と日記をもとに荒木田徳雄神主とその子孫たちが編纂した貴重な資料。

また、外宮域内にも弘長元年（1261）に神庫があったと『鎗矢伊勢宮方記』に記されている。

外宮神庫に記録文書を所蔵【神庫記事初見】（『鎗矢伊勢宮方記』）

（『神宮文庫の歩み』関係年表—神宮文庫・文書所蔵等の沿革について）

※『鎗矢伊勢宮方記』…外宮禰宜檜垣兵庫家に伝わった文書を編纂したもの。書名は檜垣家の家紋が鎗矢であることから付けられたという説もある。

現存最古の歴史書『古事記』の完成が和銅五年（712）とされており神宮の文庫収蔵の歴史がいかに古いか理解できる。「文殿」や「神庫」は神宮に関係しない文書・記録をも所蔵し、神職の研究や調査に利用されたが、広く一般に公開されたものではなかった。

鎌倉末期、当時の内宮祀官であった荒木田経延が、自己の文庫を宇治郷岡田村（現宇治今在家町）に創立し、地名をとって岡田文庫と称した。（林崎文庫の発端）しかし正平二年（1347）火災により所蔵文庫を焼失。このことは、室町中期の内宮長官禰宜の要職にあった藤波氏経が著した『氏経卿引付』に記されている。（引付とは、後に例証するために記した文書・記録をいう。）

江戸時代に入り書籍の公開利用を目的として創設された「豊宮崎文庫」（山田）と「林崎文庫」（宇治）は、長い歴史と充実した蔵書をもつことで知られている。両文庫は学問所の役目も果たし、全国から訪れた著名な学者たちの講演が幾度となく開かれていた。

その他、公開の神社文庫としては、神職の研学を目的として設立された京都の賀茂別雷神社の「三手文庫」が有名である。

—豊宮崎文庫—

「豊宮崎文庫」(宮崎文庫)は、慶安元年(1648)、岡本の西南部、外宮の東縁にあたる宮崎の地(現在の岡本三丁目)に創設された。名称について、『伊勢市史 第七巻 文化財編』には「「豊宮崎と申すは外宮宮山の東の外なる故に宮崎と云い來たる也、豊宮崎とは是外宮豊受の宮なればかく云う也」(『勢州古今名所集』)とあり、豊受大神宮の先にあることから名付けられたようである。当時、この地は錦の河内、錦の小河或いは蒼(青)海原などといわれた名勝地だったと伝える。」と記されている。

“豊宮崎”“豊宮崎文庫”について伝える古文献は、『勢陽雜記』『勢陽五鈴遺響』『伊勢参宮名所図会』『神都名勝誌』など数多くあげられる。

文庫設立の主唱者は、出口延佳(度会延佳)をはじめ、與村弘正、岩出末清、青山正清、檜垣常基らで、延佳らの提唱に神宮祠官や学者、三方会合、町年寄りなどの同志七十人が賛同した。

※ 出口延佳(度会延佳)(元和元年(1615)～元禄三年(1690))は、外宮権禰宜、国学者、歌人。豊宮崎文庫の創設、旧例の研究、神学の復興、諸社の再生、古典の蒐集などで大きな功績を残していて、後光明天皇の嘉賞を得ている。著書は『陽復紀』『太神宮神異記』『二所太神宮遷宮次第記』など多数。岡本町の祖霊社の庭内に彰功碑がある。延佳邸跡は現真珠会館(岩淵一丁目)で碑が建っている。墓は一簪坊墓地(岩淵町)にある。

設立の際には、幕府儒官の林道春(林羅山)が『題伊勢文庫之記』を寄せ、紀州の儒官永田善齋が『宮崎文庫記』を書いて祝福している。

文庫設立の目的について延佳は自著『伊勢太神宮神異記』の中で次のように述べている。「慶安元年戊子度会郡繼橋郷宮崎に文庫營建せしは、宮中に土蔵有たる例なき故、太神宮の御為神書古記和漢の書籍をあつめ、万代に残し、且は所の人にも学問をす、めんためなり。」

延佳らは書庫に内外の典籍を収集し、外宮祠官や子弟等、志学の者が利用でき、学問所にもなる文庫の設立を図ったのである。

文庫の維持管理や収蔵書籍の保存等の運営は、籍中と称した設立時の同志の団体(文庫衆ともいった)により行われた。『神宮文庫の歩み』によれば、「籍中とは所謂財団であり、八組に分けられ、順番に年行事を勤めました。『山田町方古事録』(元禄十年覚)によると、結成当時は七十人であった(『宮川夜話草』にも「造立發起の人数七十家有」との記録がみられます)のが、後には百人を超えた(喜早清在の『毎事問』には百十九人とあります)といえます。」とある。

九代山田奉行八木但馬守宗直は文庫設立・維持の努力を幕府に進言し、寛文元年(1661)、幕府よりその功を賞して二百兩の下付があった。

文庫の規則については、創立時の慶安元年(1648)、籍中により十七ヶ條から成る「令條」が定められ、文庫の経営、図書の献納、書庫の看守、図書の購入・貸出・閲覧・整理のことを規定している。

また、寛文五年(1665)に山田奉行八木但馬守が制定した「式條」は、九ヶ條あり基本財産、文庫の修理、収蔵書目の整理、講師や聴講者の接遇、火気取締り及び宿直に関することなどを定める。

文庫設立の熱意に惹かれて多くの学者文人から書籍の献納が相次ぎ蔵書は充実したものになっていった。また、多くの碩学な学者たちも文庫を訪れ、和学・漢学などの講義や講演会が行われていた。その

中には、室鳩巢、貝原益軒、伊藤東涯、大塩平八郎、井沢長秀（井沢蟠竜）、谷重遠（泰山重遠）、藤森大雅、齋藤拙堂などの名前があったという。

明治になると、山田奉行は廃されて度会府が置かれた。文庫は宮崎学校と改称されたが、明治四年（1871）には廃校となり、もとの籍中に返還された。明治十一年（1878）、神宮山田教会に貸与していた講堂が火災にあい全焼。幸い書庫は焼失を免れ、籍中の三日市大夫家に預け置かれていた蔵書も難を逃れた。二万余冊（蔵書は二万七百四十五冊）の書籍類は、神苑会を経て明治四十四年（1911）に神宮司庁に献納され、現在は神宮文庫・神宮徴古館に収蔵されている。火災の後、昭和まで残っていた建物は倉庫一棟、大観社と称する平屋建一棟及び門一棟であった。

「旧豊宮崎文庫」は大正十二年（1923）三月七日に国史跡に指定された。同十四年（1925）九月十四日、宇治山田市をもって史跡管理者とされた。

現在、文庫跡地には、文政十年（1827）二月建立の津藩士高橋知周撰文による文庫の碑と天保八年（1837）七月十日に建てられている巻菱湖筆の今文孝経碑が残されている。また、出口延佳、足代弘訓両神主の霊社を示す標石、文庫や大観社の標石などが建てられている。学問場であった文庫には天神祠も祀られていたが、明治十二年（1879）以降に廃されたという。跡地に残されている建物としては門と練塀のほかはなく、門前には「史蹟舊豊宮崎文庫」の石標があり、嘉永元年（1848）に建立されている。

『伊勢市史 第七巻 文化財編』

文庫跡に植えられているオヤネザクラ（お屋根桜）は、文庫創設を唱えた出口延住宅の屋上に生えていたものである説と、外宮の正殿の屋根に自然に根づいたものが栽植されたとする説がある。昭和六十一年（1986）七月三日に市天然記念物に指定された。

—林崎文庫—

林崎文庫の起源は岡田文庫の創立まで遡る。

豊宮崎文庫より遅れることおよそ四十年、宇治会合年寄らがかつての岡田文庫を再興することとなった。貞享三年（1686）時の山田奉行岡部駿河守勝重が幕府から百五十両の拝領を受け、翌年には五十鈴川西岸の丸山の地に「内宮文庫」を設立した。しかし土地が高湿で図書保管に不適切なため、元禄三年（1690）に隣接する林崎に移転、「林崎文庫」と改称された。この文庫は宇治会合衆の研学の学舎となり、書庫には古記録や典籍類が保存されていた。

丸山当時の「内宮文庫」の規模と内容は不明であるが、林崎への移転に伴い、皇学はもちろん和学、漢学全般に関する書籍の収集・収蔵が進められ、それとともに内宮祀官の研鑽あるいはその子弟の教育の場としても整備が図られた。

『伊勢市史 第七巻 文化財編』

“林崎”とは、鼓ヶ岳の東中腹にあたり、鴨長明が紀行歌集『伊勢記』の中で「林崎舞はではいかで通るべき鼓ヶ岳を打詠めつつ」と詠み、林崎が景勝の地であることを伝えている。

百年も経たないうちに荒廃の一途をたどってしまった文庫の再興に献身したのが宇治会合の大年寄を務めた内宮権禰宜の荒木田（蓬萊）尚賢らであった。

※ 荒木田尚賢（蓬萊尚賢）（元文四年（1739）～天明八年（1788））は、内宮権禰宜、国学者。通称は雅樂。谷川士清に学んでその後賀茂真淵の門に入り国学を修めた。又、歌文に長じ、書画の鑑識にも造詣深かった。妻は谷川士清の娘である。また同門の本居宣長とも古くから親交があった。宝暦事件の際、京都を追放された竹内式部を宇治に保護した。尚賢邸跡は、宇治中之切町の荒木田守武屋敷跡の西側付近。墓は今北山墓地（宇治浦田町）にある。

尚賢らは、天明二年（1782）に書庫や講堂、塾舎などを増改築し、江戸・京都・大坂に取次所を設けて献本に尽力し、後に荒木田尚賢は“文庫中興の祖”と称された。同年、本居宣長は「林崎のふみくらの詞」を著して、一流の擬古雅文体で林崎文庫の再興と存在を称揚している。

柴野栗山は、文庫再興の経緯を『林崎文庫記』に詳しく記し尚賢の事業を激励している。また、京都で古書販売を商いとしていた勤思堂の村井敬義（古巖）は尚賢の功績に感銘、図書二千六百二部を献納し、その中には多くの貴重図書が含まれていた。寛政九年（1797）刊行の『伊勢参宮名所図会』によりその当時の林崎文庫の様子が窺われる。その後、文政四年（1821）、多湿のため南下方の現在地に移築が計画され同六年に移転した。正面の石段が整備されたのもこの時期である。

明治期に入ると、建物は一時的に学校施設として利用されたが、明治六年（1873）に林崎文庫の建物・敷地とおよそ一万二千冊の所蔵書籍が神宮に献納された。明治三十九年（1906）には宇治館町に神宮文庫が新築されるに伴い、林崎文庫は旧跡の扱いとなり、昭和二十九年（1954）国指定の史跡となった。史跡内には、本居宣長「林崎ふみくらの詞」、柴野栗山「林崎文庫の記」、沢田東江「古文孝経碑文」、金森得水和歌一首を刻んだ石碑が遺されている。石碑に刻まれたその文章から今も尚、林崎文庫の往時を偲ぶことができる。

豊宮崎と林崎の両文庫は図書館であるとともに神職子弟の教育の機関であった。

さらには碩学大儒との交流を通じて発展し、神都伊勢と京都、大坂、江戸などの文化的先進地を結ぶ役割を果たしてきた。

—神宮文庫—

神道学最大の宝庫として知られる神宮文庫。

明治四十年（1907）四月に五十鈴川の清流を望む宇治館町に創設され、平成十九年（2007）には神宮文庫開庫百周年の歴史が刻まれた。

明治四年（1871）の神宮の組織制度改正にともない、司家公文所・文殿・神庫・両宮子良館の蔵書約一万四千四百冊が集められた。次いで同六年（1873）には神宮司庁が元宇治会合大年寄から林崎文庫収蔵本を引き継ぎ、これを母体として同三十九年（1906）宇治館町に書庫及び閲覧室を備えた神宮文庫を竣工、翌年に設立し、蔵書数は五万冊に及んだ。

その後、明治四十四年（1911）に当時神苑会の所管にあった豊宮崎文庫収蔵本約二万冊が献納されるなど、古書典籍の充実と整備を徐々に進めてきた。しかし蔵書数が激増し書庫が手狭になったことや、大正七年（1918）の五十鈴川の氾濫により大きな被害を受けたこと、さらに同十一年（1922）には神宮文庫の管理が神宮皇學館に移されたことを契機にして、同十四年（1925）、すでに農業館、徴古館、皇學館が完成し伊勢の文教地区を形成していた倉田山の南側に移転、現在に至っている。蔵書数は約十万冊であった。

現在、神宮文庫は神宮司庁が運営。二十万冊の和書を含む約三十一万冊を所蔵し、日本の文化や伝統の調査、研究に欠くことのできない貴重な神道、文学、歴史などの和書を永久に保存することを目的としている。

国宝の『玉編卷廿二』^{ぎよくへん}（平安時代初期）をはじめ、国重要文化財の『皇太神宮儀式帳』^{こうたいじんぐうぎしきちょう}（鎌倉時代）、『等由氣太神宮儀式帳』^{とゆけだいにんぐうぎしきちょう}（鎌倉時代頃）などの貴重資料を数多く収蔵している。

神宮文庫は、御幸道路から黒門（旧御師福島御塩焼大夫邸門）^{おんしふくしまみきやきだゆうてい}をくぐり石敷きの坂道をのぼった小高い丘に位置し、敷地中央に本館、その背面に書庫が佇んでいる。

大正ロマン漂う和洋折衷の建造物について『伊勢市史 第七巻 文化財編』はこう記す。

「本館の建物、特にその外観は、全体から部分に至るまで造形的表現を意識したものであり、そのデザインと手法には時代を反映した、ある種の自由と大らかさが感じられる。大正末期（1920年代中頃）という時代を考えれば、明治（1868～1912）から大正（1912～1926）・昭和へ移行する建築思潮のなかで、いわゆる様式主義とモダニズムの狭間に生まれた建築とも理解されよう。」

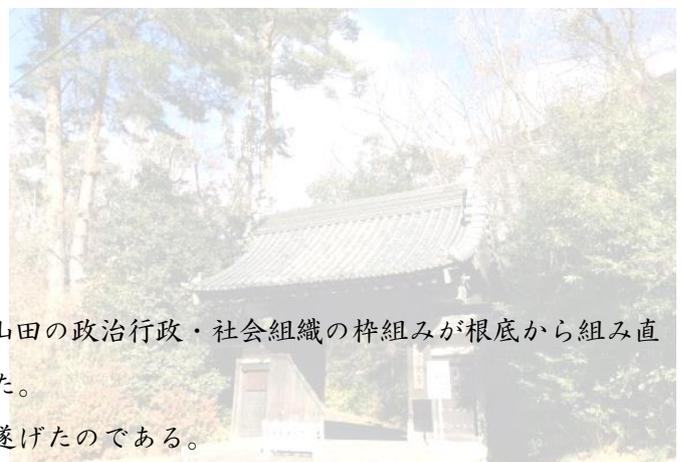
また、通称“黒門”は、八日市場町に屋敷地を構えた外宮の御師福島御塩焼大夫邸の表門を、昭和十年（1935）に現在地に移築したものである。福島大夫は江戸期以前から御師の活動を繰広げて繁栄し、江戸期には山田三方の年寄家を務める一方、外宮の別宮土宮の御塩焼物忌職にあった。建立年代は、棟木の墨書銘により安永九年（1780）に創建されたことが判明。現存する御師邸の門としては年代が最も古い。格式の高い堂々たる構えの薬医門は、当時における御師の経済力を物語っており、市の有形文化財に指定されている。

文庫から図書館へー。

神都伊勢の図書館は交修図書室から始まった。

近代伊勢の幕開けー、明治維新を迎え、宇治・山田の政治行政・社会組織の枠組みが根底から組み直される中で、市民生活も大きく様変わりしていった。

後に宇治山田は「神都」として目覚ましい躍進を遂げたのである。



—交修図書室—

各地での政治活動や、社会啓蒙の拠点となったのは結社であった。明治七、八年ごろから全国的に結社が設立されたが、その性格は必ずしも政治活動にとどまらず、学習・勸業・親睦などを目的とし、政治活動を含まないものも多かった。

伊勢地方で確認できる初期の結社としては、(明治)九年に山田で設立された交修社がある。これは十一年発刊の『伊勢新聞』で確認できる県下最初の学習討論の結社であるが(西川洋「三重県における初期民権派の結集過程」、山田師範学校教官の椿泰一郎・佐野嘉衛、地元の有志の村井恒蔵・橋本三郎(十二年二月の時点で暢登学校五等訓導)らによって結成された。『伊勢市史 第四巻 近代編』

明治九年(1876)、交修社の結成と同時に会員の研修のために「交修図書室」が設けられた。明治十五年(1882)になると、村井恒蔵(初代宇治山田町長)らが機関紙を発行し交修社の活動を推進。その頃には社員らは、豊川小学校(伊勢市立厚生小学校の前身校の分校)に集まり毎日午後三時から同十時まで書籍を閲覧し、知識を交換した。同年四月三日、厚生尋常小学校で実質的な交修図書室の設立式をあげ、図書の後閲覧所として、大世古町の小川稠吉宅を利用した。

明治三十七年(1904)、度会郡教育会第一支会に於いて、日露戦争終結の記念事業として図書館を設置する計画が浮上。同三十九年(1906)、交修社は九百六十余冊の図書を寄贈し、新しく同会により交修図書館が運営されるようになった。同四十一年(1908)には、小川稠吉宅より市立男子高等小学校(豊川町)の一部へと移設され、大正十年(1921)、宇治山田市第六尋常高等小学校内(現明倫小学校)に移設となった。

昭和元年度末に於ける蔵書冊数は約三千冊であった。

明治末期以降、図書館が通俗教育或いは社会教育の方法として重視され、行政側や教育会によって奨励或いは設置が進められた。伊勢市においても独立図書館設置の運動が、市の教育委員会と黎明会(市の現状に鑑み、その将来を夢みて調査・研究・広報を行った団体)の松葉憲太郎らによって推進された。彼らは市議会議員を通じて当時の福地市長にその趣旨を再度にわたり働きかけた。

—宇治山田市立神都図書館—

宇治山田市は、神都公会堂と同時に図書館建設の計画を進め、神都公会堂については、宇治中之切町の神宮祭主官舎の構内にあった神宮奉斎会の所管の建物(倭姫宮創建記念として神都公会堂を建設するため、大正十二年八月に神宮から無償譲渡をうけた瓦葺、総檜寝殿造りの建物。)をあてた。図書館については、常磐町にあった元御師橋村肥前大夫邸(当時、御師邸では最古の木造建築であった。)の一部で、専売局宇治山田出張所であった建物を買収して岩淵町の箕曲に神都公会堂とともに設置。「宇治山田市立神都図書館」として昭和三年(1928)五月一日開館した。蔵書は交修図書館から引き継いだ。開館当初は新聞や雑誌の閲覧を主としていた。

神都図書館の設立に注目していた『伊勢新聞』は開設後の市民の利用状況に関心をもって報道している。そして、三年六月五日付の同紙は、開設後最初の一ヶ月の利用状況について、閲覧者男性七五八名、女性四三八名、計一一九四名で、一日平均一五五名であるとして「好成绩」と記している。しかし、閲覧者数はその後減少し、昭和四年一月の実績は男性八四五名、女性七一名、計九一六名であった。（『宇治山田市公報』昭和四年二月五日付）これについて四年二月十七日付の『伊勢新聞』は「閑古鳥鳴く神都図書館 内容充実策に悩む市当局」との見出しで次のような記事を載せている。

宇治山田市立図書館は意想外閲覧者が少なく、寒気酷烈の昨今は終日閑古鳥が鳴くと云うような有様であるが、原因は一般市民の読書欲が鈍いにも因るが、一つは冬期間暖炉装置がないのと館内の一部は商工会議所の事務所に占有され、閲覧室の設備を欠いているのも一因であるが、兎も角四月一日からは夜間閉館を為すと共に、図書の貸出し制度を始める筈である。尚明年度の同館経営費は約四千元で内一千五百円は図書購入費に当、館の内容充実を図る方針である。

『伊勢市史 第四巻 近代編』

初代図書館長の伊藤百助や松葉憲太郎らは、市内の有志に寄附や図書の寄贈を呼びかけ、自身も率先して基金とともに多くの図書を寄贈した。

この頃、伊勢地域には四郷図書館、夕陽園文庫、西条区通俗図書館が設立された。また一般市民の読書運動を盛んにするため、各地区にある理髪業者宅に図書を寄託して住民の閲覧に供した。これは当時床屋文庫の名で親しまれたものである。

神都図書館は、戦災を逃れ、蔵書も無事であったが、戦後しばらくは休館せざるを得なかった。終戦から一年経過した昭和二十一年八月に漸く平常通り図書館が活動し始めた。

—宇治山田市立図書館—

昭和二十四年（1949）五月、神都図書館は「宇治山田市立図書館」と改称した。

同二十五年には、図書館法が制定され、県下有数の公立図書館として市民に利用された。市立公民館（神都公会堂）と並存していた建物は、昭和二十八年（1953）、伊勢会館建設のため解体され、翌年二月、伊勢市駅前本町の観光物産館別館に移転した。

『伊勢市史 第五巻 現代編』には、「駅に近いことや採光などの関係からか一時閲覧者が増加した。同年の閲覧者数は二万七五二六名、閲覧冊数は三万三〇五四冊を数えた」と記されている。

—伊勢市立図書館—

昭和三十年（1955）、市名改称に伴い「伊勢市立図書館」と改称。同三十一年（1956）には、図書館活動の一環として住民のための巡回文庫が設置された。また、市内各所に読書グループが結成された。

昭和四十六年（1971）、観光物産館別館売却処分が決まったため、八日市場の伊勢実業高等学校西北

端校舎（旧宇治山田高等学校校舎）に移転。同四十八年（1973）、岡本三丁目の旧豊宮崎文庫跡の隣接地に新図書館が建設され開館した。これは、市が移転先にあったパールセンタービルを買い入れ、約一億円かけて改装したものである。

新図書館は、四方ガラス張りで採光がよく、豊宮崎文庫（国史跡）、に隣接し、西方に外宮の森があり、環境がよいことで市民から喜ばれた。特に新たに設けられた「子ども図書館」は、子どもたちに親しまれた。閲覧室（一三五平方メートル）は、机一八、回転椅子七二、子ども図書室（八二平方メートル）は、四二席、絨毯を敷いて家庭的なムードを造成し、ロビーには民俗資料コーナーを設け、冷暖房完備の近代的図書館として開館した。この年、閲覧人員は二万四二八三人、閲覧冊数四万二七四四冊を数えた。

『伊勢市史 第五巻 現代編』

岡本の図書館の老朽化が進み、手狭になったことから平成元年（1989）、新図書館建設の計画が持ち上がった。

新しい図書館の建設地は、八日市場の福祉健康センター西隣で、平成三年（1991）五月に着工、平成四年（1992）三月に工事が完了した。

新図書館は鉄筋コンクリート造り三階建て、延べ床面積二三九〇平方メートル。閲覧室の一部は吹き抜けで、ゆとりを重視した設計である。視聴覚室や A ^{オーディオビジュアル} V コーナー、会議室などを設けている。さらに図書館業務にコンピューターを導入し情報化時代に即した先進の設備を誇る図書館であった。

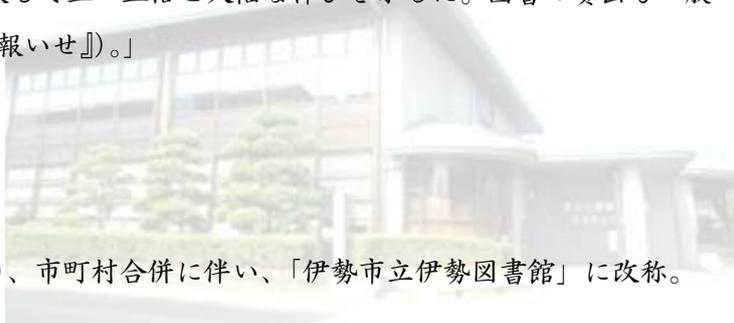
館内には伊勢の風景を表した二つの壁画がある。一階ホールには五十鈴川の流れを表現した「明日への流れ」、一階児童書コーナーには伊勢市の山（神路山・高倉山・倉田山）を模った「希望」。いずれも橋本博文氏（大橋設計）デザイン、辻田岳秀作陶である。

また、ふるさと創生事業（自ら考え行なう地域づくり事業。1988年から1989年にかけて、各市町村に対して地域振興の為に一億円を交付した政策。）の一環として「ふるさと文庫」が設置された。「ふるさと文庫」は、郷土伊勢の歴史や文化、産業、郷土著名人の書物など伊勢地域に関わる文献や資料を備えている。

平成四年（1992）十月一日、新図書館が開館した。

『伊勢市史 第五巻 現代編』にはこう記されている。

「新図書館は四年十月一日開館し、十一月末までの二カ月間で入館者数は四万七七〇〇人を数え、旧館に二ヶ月平均と比較して三・五倍と大幅な伸びを示した。図書の貸出も一般・児童ともで三万八一三六冊にのぼった（『広報いせ』）。」



平成十七年（2005）、市町村合併に伴い、「伊勢市立伊勢図書館」に改称。現在に至る。

日本に図書館を初めて紹介したのは福沢諭吉であるとされている。福沢は慶応二年（1866）に『西洋事情』という欧米の見聞記を刊行。その“文庫”の項で次のように紹介している。

西洋諸国の都府には文庫（図書館）あり。ビブリオテーキと言う。日用の書籍、図画等より古事珍書に至るまで万国の書みな備わり、衆人來たりて随意にこれを読むべし。ただし毎日庫内にて読むのみにて家に持ち帰ることを許さず。ロンドンの文庫には書籍八十万巻あり。ペートルスビュルグ〔ロシアの首府〕（ペテルブルグ、今のレニングラード）の文庫には九十万巻、パリ（パリ）の文庫には百五十万巻あり。私人言う、パリ文庫の書を一列に並べるときは長さ七里なるべしと。

文庫は政府に属するものあり。國中一般に属するものあり。外国の書はこれを買ひ、自国の書は國中にて新たに出版する者よりその書一部を文庫へ納めしむ。

『日本の名著 33 福沢諭吉』

福沢が「ビブリオテーキ」を紹介してから六年後、日本初の図書館が開館した。

文庫から図書館へという呼称の変化は書物の専有から共有へという流れを背景にしている。

図書館は時代の変化に合わせて自ら変革して進化していかなくてはならない。

しかし書物が連綿と受け継がれてきた歴史も大切である。

過去、現在、未来の人々と書物を共有する事も図書館の使命ではないだろうか。

伊勢図書館は、昭和三年（1928）五月一日

神都図書館として開館。

今年、九十周年を迎えました。

先人たちが築き上げてきた知識の宝庫は時空を超え、

この地で今も生きつづけています。

図書館だより 11月号 No.201 増刊 ふるさとの風 霜月 2018.11 平成30(2018)年11月10日発行、平成30(2018)年11月16日2版発行

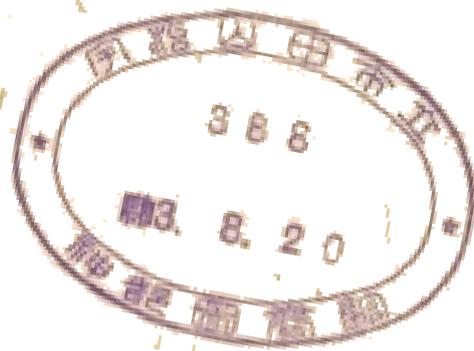
(編集・発行) 伊勢市立伊勢図書館 指定管理者/株式会社図書館流通センター (住所) 〒516-0076 伊勢市八日市場町 13-35
(電話) 0596-21-0077 (FAX) 0596-21-0078 (ホームページ) <http://iselib.city.ise.mie.jp/>

© 2018 mami ishikura

ふるさとの風 霜月
2018.11

神都図書館 90th ANNIVERSARY

文庫礼讃



【参考資料】

- ・『図説本の歴史』 樺山紘一／編 河出書房新社 020.2／ズ
- ・『図書・図書館史』 綿拔豊昭／著 学文社 010.2／ワ
- ・『図書館と江戸時代の人びと』 新藤透／著 柏書房 010.2／シ
- ・「続日本紀 5」(『新日本古典文学大系 16』) 岩波書店 918／シ／16
- ・「徳川実紀 第一篇」(『国史大系 38 新訂増補』) 吉川弘文館 R210.08／コ／38
- ・『神宮文庫沿革史料』 神宮文庫／編 神宮文庫 L018／ジ
- ・『神宮文庫の歩み 神宮文庫開庫百周年記念誌』 神宮文庫／編集 L018／ジ
- ・「太神宮諸雑事記」(『神道大系神宮編 1』) 神道大系編纂会／編集 神道大系編纂会 L170／シ／1
- ・「鎬矢伊勢宮方記」(『二宮叢典 前篇 増補大神宮叢書 20』) 吉川弘文館 L174／ダ／20
- ・「伊勢太神宮神異記」(『神宮参拝記大成 増補大神宮叢書 12』) 吉川弘文館 L174／ダ／12
- ・「勢州古今名所集 卷三」(『神宮随筆大成 後篇 増補大神宮叢書 16』) 吉川弘文館 L174／ダ／16
- ・「内宮禰宜荒木田氏経引付」(『続群書類従 第1輯下』) 塙保己一／編 続群書類従刊行会 081／ゾ／1-2
- ・『伊勢参宮名所図会』 藪関月／画編 原田幹／校訂 国書刊行会 L290／シ
- ・『宇治郷之図』 伊勢古地図研究会／編 伊勢文化会議所 L243／ウ
- ・『伊勢市史 第4巻 近代編』 伊勢市 L243／イ／4
- ・『伊勢市史 第5巻 現代編』 伊勢市 L243／イ／5
- ・『伊勢市史 第7巻 文化財編』 伊勢市 L243／イ／7
- ・「西洋事情」(『日本の名著 33 福沢諭吉』) 中央公論社 081／ニ／33
- ・神宮司庁ホームページ
- ・伊勢市立伊勢図書館 図書館概要